



深沢橋から池代の窟

自分の村の池代の大窟には、えらい古狸が棲んでいて、地続きの深沢の橋へ出て、通るものを嚇すとはもっぱら言うたことである。ちょうど村の途中で、上と下の組の間の谷に架かっていた橋である。もう二〇年ばかり前であるが、橋の近くに住んでいた某の男が、夜更けに一人帰って来ると、橋の

欄干に坊主が一人凭れていたが、それが見る見る大きくなったのに、胆を潰して遁げて来たと言うた。村の某の家のものであるが、五〇年ばかり前、夜分ここを通りかかって、狸に嚇されたのが因で死んでしまった話がある。まだ宵の口だったそうであるが、橋の近くにあった家へ、血相を変えて駆け込んで来たと言う。よくよく物の怪を見たと思えて、戸口では一と言ったぎり、土間へ倒れてしまって、後は口も利けなんだそうである。その夜はそこへ寝かせて、翌日家へ連れて行ったと言うが、四、五日して息を引き取ったそうである。病んでいる間も、絶えず怖（おそ）がい怖がいと言い通していたと言うが、果してどんな怪を見たことか、家人が堅く秘して一切他人には話さなんだというから判らない、まだ、二〇かそこいらの若者で、ごく実直な男だったそうであるが、何でも下の村に馴染の女があつて、そこへ通っていく途中だったとも言うた。「三州横山話」にある、老婆を殺して山へ持って行ったのも同じ狸の仕業と言うことである。深沢の橋には、クダ狐も出ると言うた。あるいはまたそこで幽霊に遇ったと言うものもあった。ごく新しい話で、近くの家に葬式があつて、暮方村のものが橋を行ったり来たりしていた、そこへ一人が橋の袂まで来ると、土手に男が凭りかかってこちらを見ていたが、通り過ぎて振り返って見ると、もう影も形もなかった。大方幽霊だろうと言うて、大騒ぎをやったそうである。

村を出離れて、長篠へ越す途中の馬崩れの森は、田圃を三、四町過ぎた処に一叢大木が茂っていて、日中でも薄気味の悪い処だった。ここからずっと長篠

の入口まで山続きになるのである。ここにもまた悪狸がいて、通るものをときおり嚇すと言うた。あるいはまた山犬も悪い狐も出ると言うて、いずれにしても問題の場所だったのである。自分などのここを通った経験でもそうであるが、暮方などはまだ明るい田圃道から、暗い森の中へ足を運んで行くと、地の下へでも入るように自ずと心持まで滅入って来る。また反対に暗い森の中から、田圃道へ出るとほっとするが、それだけに何だか後ろから引っ張られてもするように不気味を感じたものである。そんなわけでもあるまいが、田圃の手前の、村の取付きにある家へは、以前は夜分真っ蒼になった男が、ときおり駆け込んで来たそうである。

ある男は暮方森の手前に差しかかると、一町程前を、太い尻尾を引きずって、狸が歩いて行くのを見たが、道の中央でくるくる廻り出した、そして道下へ飛び込んだと思ったら、娘になって上がって来たなどと、狐にでもありそうなことを言うていた。また某の修験者は、夜更けて一人行くと、行く手を豆絞りの手拭で頬被りをした男が鼻歌で行くが、どうも様子が怪しいと思って、一心に九字を切ると、果して道下の池へ飛び込んだ、と真面目になって語ったものである。

これは自分の祖母の話だったが、父がまだ少年の頃で、夜遅く二人で通りかかった時、ちょうど森の中程で、何か怪しいものを見たと言う。大方狸の悪戯だろうと言うたが、何を見たのか、それ以上聞いても話さなかった。